# リスク社会の雇用問題

## ―「選択的非注意」による問題解決 ―

杵渕　友子

## 【問題意識】

非正規雇用という就業形態は，当然ながら正規雇用を前提としているものである。筆者は拙稿で（2011）[1]，現代のような「危険社会」（1986）[2]における経営管理の視点から，非正規雇用状態が一部の労働者の一時的なものではなく，労働者全体におよぶリスクがあること，かつその状態が一時的ではなく常態化されつつあることについて考察した。

また，失業中とは，就業と就業の間のことで，いずれは就業することを前提とした状態のことである。その前提が崩れつつあることを指摘したのが，今回取り上げるジグムント・バウマン（2004）である[3]。すなわち，正規雇用の崩壊どころか，事態はさらに一歩進んで，有職状態から切り離されるほうに進行中であるという，リスクの強度が増していることを指摘しているのだ。バウマンの見解では，ポスト・モダン（ここでは後期近代のこと。近代のあとではない）においては「地球は満杯」ということである[4]。それをバウマンは技術的な意味ではなく，「社会学および政治学的な意味で」満杯であると，強調点を付して言明している[5]。技術的とは，たとえばローマ・クラブに提出された報告書，「成長の限界」（1972）にあるような，人類の危機の諸要因である人口問題，エネルギー問題，公害問題，等々を想起すればいいだろう。一方，社会学的，政治学的とは，一言に集約すれば，メンバーシップの問題，あるいは範囲の恣意性のことであると言えるだろう。逆にメンバーシップから排除されたものの側から見ると，それは余剰の問題となる。

筆者は今回も ― 特に若年層の ― 雇用という関心領域は変わらないまま，この問題に今一度考察を試みることにした。前回のそれを否定したり修正したりする必要からではなく，以下のバウマンに見るように，さらに激しい言葉で記述をすることで現状をより正確に再認識しておくべきであると考えたからである。言わば，これまでの論考の補強である。というのも，昨今の雇用現場からの各種事例は，バウマンの視点を裏付けているように見えるからである。

## 【後期近代に対するもう一つの見方】

冒頭でも言及したが，バウマンは「地球は満杯である」という。バウマンの意味するところは，「自然地理学的なものでなければ，人文地理学的なものでさえな」く，それどころか「物理的な空間および人間の共同生活という観点から見れば，地球は満杯にはほど遠い」[6]という。バウマンは，後期近代，別言するとリキッドな近代では（バウマンの別の著作から。『リキッド・モダニティ』2000/2001）「近代的な生活形式がグローバルに広がったことによって，生物的な意味でも，社会的／文化的な意味でもこれまでは適切であった生存のための慣習的な方法を奪われた人々が大量にうまれ，その数は一貫して増加し始めることとなった」[7]ので，「近代生活の諸側面についての再検討を可能ならしめるようなオータナティヴな視点」[8]を提示しようとしているのである。そのための切り口として，バウマンは今や近代は「人間廃棄物」を産出する時代に入っているという見方を展開した。「人間廃棄物（wasted humans）」とは，なんと耳に痛い呼称だろう。しかしバウマンは，「廃棄」の事実より ― 振り返れば，これまでも人類史上，人間の「廃棄」は常にあった ― 廃棄先の消滅のほうこそを強調したいのだ。かつての余剰人口の処理方法で「習慣的方法」として採用されていたのが「入植と開拓」，すなわち「植民地化と帝国主義的征服」であった[9]。言い換えれば，ローカルな過剰にグローバルなはけ口をあてがってきたのだったが，今やそのはけ口となる地域が消滅した，すなわち「地球が満杯になった」というのだ。それをバウマンは「人間廃棄物処理産業の重大な危機」[10]と受け止めている。

バウマンはその兆しを，1970年代に生まれたいわゆる「ジェネレーションX」に見いだそうとする。なぜなら，彼らは「古い世代が知らなかったような」，「明らかに異なった新しい種類の不快」を経験しているから，と[11]。それは，失業（unemployment）などという，一時的で例外的であることをしめす接頭辞（un）からくるものではない。もし失業が文字通り一時的であるならば，その処方箋は「雇用」である。しかし，ジェネレーションXが感じている不快は，実のところ「余分」という概念である。それには「既成の反対語がない」[12]。「余分」が示しているのは，「現在の正常性が新しいタイプのものであるということ，そうした事態こそが差し迫ったものであり，現状のままずっとつづく運命にあるということ」[13]である。

「余分」であることが意味しているのは，定員外であること，必要とされないこと，役に立たないことである。彼らの不快感は，国家の補助の対象になることによる自尊心の毀損からよりも，「社会的なホームレス状態」[14]になる不安から発している。また，その状態の原因を怠惰に求められたり，犯罪性向を疑われたりすることがさらに不快感を増大させている。社会が生産社会であったときは，失業者は予備隊というポジションがあった。しかし現代の消費社会において実力を発揮できない消費者に居場所はない，ということである。しかも，その社会的配置の分割線

は不安定であり，分割線はヒエラルキーを上昇しつづけ，今や高等教育の学位にまで最低限の条件が近づいてきている（ただし，学位保持者が安泰である保証はない）。ジェネレーションXの不快感と先行世代のそれとを比較してみると，ジェネレーションXの独自性はつぎの二つである[15]。一つは，「そのコーホートの非常に多くの部分が，無視され引き離されている，あるいはまるでそうされたかのように感じている」こと，今一つは，「混乱，困惑，当惑の感情が広範に見られる」ことである。言い換えると，同世代人の多くが社会から切り離され無視されていると感じ，また，たとえ今はそうでない人たちも，明日は我が身の恐怖を抱えているということである。決定的なのは，生産社会であれば，目標を就業に置けば済んだものが，消費社会となった今ではそれを誰も示せないことにある。すなわち，「いちど排除され廃棄物に割り当てられてしまうと，一人前の完全なメンバーシップへの明白な帰り道など誰にも存在しない」[16]という点である。

以上，バウマンはジェネレーションXに焦点をあてて，後期近代の理解する新たな視点を提出したが，人間廃棄物の源泉を3つ挙げている：秩序建設，経済の進歩，グローバリゼーション，である。どういうことなのか見てみよう。

### （1）秩序建設

まず，近代特有のものとして，設計図の誕生がある。それは人間が神に代わって世界を変更できるという観念から生まれたものである。設計図がなかったときは，世界に秩序もないかわり，混乱もなかった。あるがままだった。しかし，いったん設計図を引き始めれば，世界に「秩序の理想像（ビジョン）とともに無秩序を呼びだ」[17]すことになる，すなわち，あるべきものと，その他と。人類は自然にたいして二つの方法で新しいものを創造してきた。それは農業と鉱業であり，バウマンは近代の創造の流儀は農業ではなく鉱山業のパターンに似ているという。すなわち農業が象徴するのは継続性，鉱業は断続と非連続の典型である，と。鉱業においては目的とする製品が創造されるまで，分離と除去の過程が繰り返される。バウマンのワーディングでは，「廃棄物の分離と破壊は近代的創造の企業秘密」[18]となる。言ってみればそれは，廃棄物あってこその製品であるという構造である。製品と廃棄物の境界線を厳密に守るには，専門知識と熟練と権威を要する。「人間の共同性の形式の設計となると，（中略）廃棄物は人間である。（中略）設計に合わない，合うこともありえない一部の人間である」[19]。そしてバウマンは，共同性の新しい形式の別名を秩序建設と呼ぶ[20]。

バウマンは，ジョルジョ・アガンベンの『ホモ・サケル』(1995/2003) における法についての論考に依拠して，法こそが内を外から分かつ線を描くことによって無法状態をうみだす，という秩序建設と同型の論理を見いだしている。排除された存在の理念型的モデルを，アガンベンに

従って，ホモ・サケル[I]とすれば，現代版のホモ・サケルは「一連の実定法によって規定されることもないし，法規則に先立つ人権の担い手でもない，と言えるかもしれない」[21]からと，ホモ・サケルは「秩序だった（法を遵守し，規則に支配された）主権的圏域が近代に生産されていく過程で設計された人間廃棄物の主要カテゴリーである」[22]と同定した。そして，今日の国民国家は，「青写真を描くことをもはや統括していないかもしれない」ものの，「いぜんとして主権の基礎的・構成的特権，すなわち免除する権利を主張している」[23]ことを強調した。

## （2）経済の進歩

前項をおさらいすると，近代において共同性の形式を設計，すなわち組織構築するときに，組織同一性を保持するために排除が発生し，それが人間廃棄物を生んだ，という指摘であった。その動きには設計の意図が存在していたが，つぎにバウマンは意図的ではない，「付随的な犠牲者」を取り上げる。

かつて困窮した者は，「より発展した」（よりいっそう激しく近代化を遂げている）場所から「未発展の」（近代化の衝撃による社会経済的な均衡の崩壊をいまだ経験していない）地域へと移住していった。余剰人口を生み出した国々は，近代化の影響を受けていない諸地域をあたかも「空き地」[24]のように思いこんでいた。余剰人口は人間廃棄物のもう一つの変種である。バウマンは言う[25]：

> 秩序建設の設計図の犠牲者であるホモ・サケルとちがい，彼らは主権者の命令で法の保護を免除された「正当な標的」ではない。彼らは，むしろ，経済進歩の，意図されることも計画されることもなかった「付随的な犠牲者」である。

バウマンはそれを，経済進歩の副産物と見る。それは，「純粋に技術的な問題」である，と。そこでの主体は，貿易条件，市場の需要，競争圧力，生産性，効率性であり，生身の人間の意図，意思，決定，行動とは無関係に，それらを「すっかり覆い隠したり明白に否定したり」しているという。いずれにしろ影響を被る人間からしたら，「設計に基づく計画的な受難と過失による悲惨とのあいだ」の差異はない[26]。

従来，人口過剰が問題とされるのは，つねに発展途上国であり，先進国はむしろ人口のゼロ成長に憂慮していた。しかしバウマンは，「人口過剰の程度は，ある特定の国家が所有している資源と，ローカルな環境のもつ人間生活を維持する能力とによって，どれだけの人間が維持され

---

I　バウマンは一貫して「ホモ・サケル」に強調点を付けた表記をしているが，拙稿では省略した。

るかという観点から測定されなければならない」[27]と注意を促す。「福祉国家」と言われた国家の保護機能は次第に縮小し，「雇用に適さない病弱者のごく一部を包含するだけになっている」が，その一部の人々さえも，社会的なケアの問題から法と秩序の問題へと分類されなおされる傾向にある」[28]。別言すると，労働市場に参入できない人間は犯罪者扱いされる傾向にある，というのだ。ということは，失業は社会の問題ではなく，個人で解決をするべき問題になってきたということである。

### （3）グローバリゼーション（注）

三つ目にバウマンはグローバリゼーションを挙げるが[29]，ここではグローバリゼーションの真の問題が，「合法と」「非合法」の区分の失効に求められている。というのも，この区別を描くことができるのは，「永続的に実施可能な法律だけ」で，そうしたグローバルな法など存在していないからである。マフィアの犯罪的経済行為と通常の企業活動とは分離ができないというのだ。このグローバル空間で国家権力ができることは限られてくる。グローバリゼーションの主要産物が不確実性とそこから派生する苦しみだとすると，国家権力にできる精一杯のことは，不確実性をハンドル可能の対象範囲に絞り込むことである。たとえば，難民，亡命希望者，移民であり，これらこそグローバリゼーションが生み出した廃棄物となる。社会的問題をそこに集中させることで，他の問題から目を逸らせる統治方法と言える。

この十年で（当書籍が出版されたのは2004年）人々が生きていく上で難題に立ち向かう際の状況は「こっそりとではあるが根本的に変化を遂げ，生きるための既存の知恵を無効にし，生活戦略の徹底的な修正と分解修理を要請した」。すなわち，「近代的な生活様式がグローバルに普及し，今や地球の最果ての限界地にまで達しているということ」がもたらす変化がわれわれに認識と対処法の更新を迫っている。それが，「中心」と「周辺」の境界線を（中略）無効にした。かくして，先に（1）と（2）で取り上げたような秩序建設と経済進歩といった近代化プロセスがいたるところで展開され，人間廃棄物がいたるところでたえず量産されるようになった。その結果，グローバリゼーションの帰結として，かつては人間廃棄物の引き受け地であった地域が消滅し，かつ，そこからの人間廃棄物（難民，亡命希望者，移民）が逆流してくるようになったのである。

また，グローバル空間の無法性は，直接の犠牲者になることは避け得たとしても，「付随的な犠牲者」になる運命を免れるためにできることはなにもないということを突きつける。この平等性こそがベックのいう「危険社会」であるが，世界中がグローバルなフロントラインになったため，有用（すなわち，生き残り）と廃棄の線引きは安定することがないということである。

以上はバウマンが主にジェネレーションXの観察から得た所見であるが，つぎに日本の現状と照合してみよう。

## 【日本における団塊ジュニア世代とそれ以降】

今，日本の社会で起きている変化は「革命」とさえ呼べると見る論者がいる。岩間夏樹(2010)[30]であるが，ここではその行論の中から特に就労意識の世代変遷の部分を取り上げたい。われわれが今，経験している複合的な変化は先進国に共通に見られる変化で，モダンからポスト・モダンへの変化と言っていいが，岩間は，日本はその変化をどうやら「最先端で経験しているよう」だという感触をもっている[II]。これは，近代世界に起きている変化の中で，日本特有の変化が見られるということであるが，岩間はそれを「ライフスタイルの五十五年体制」から高度消費社会型のライフスタイルへの変化と呼び，この体制の崩壊を「革命」と呼ぶ一因と位置づけている。

「ライフスタイルの五十五年体制」とは，高度成長期に出現した，終身雇用，年功制を背景にした企業のサポート体制の中でモノの豊かさを追求していく生活を指す。だがそれは，1990年頃から企業のサポート体制が削減され始めたことで，バブル崩壊と平成不況の中でほぼ消滅した[31]。世代の分類をしてみると，高度成長期になるまでが団塊世代（昭和22年から24年生まれ），高度成長期定着後が「新人類―オタク世代」，その後の団塊ジュニア世代（おおむね昭和45年以降生まれ）は不況期育ち世代（イコール，ライフスタイルの五十五年体制の崩壊過程）となる。また，それをモノとの関係でラフにスケッチして当てはめてみると，モノの豊かさを求めた世代，モノはすでにあった世代，モノはミニマムでいい世代，となろう。すなわちミニマム世代は，仕事に向かうモチベーションがモノの豊かさの獲得に起因されなくなった世代である。岩間がこの団塊ジュニア世代に注目するのは，それが人口のボリュームゾーンだからであり，今後の方向性は彼らによって示されるのではないかと推量しているのである[32]。団塊ジュニア世代は，バウマンが注目したジェネレーションXとはほぼ10年遅れているが，洋の東西を問わず，このモノの豊かさにとらわれない世代は，何を動機づけとして生きればいいかわからないという課題に直面することとなった。その課題に対して，目的よりも過程に関心をシフトさせる選択も一つの答えで，そのことは2009年春の新入社員意識調査にある，「人や社会から感謝される仕事がしたい」という考えに94.1%が肯定的回答をしていることに見て取ることができる[33]。また，働く目的を世代順に見てみると，「リッチ」，「チャレンジ」，「エンジョイ」と移ってきている[34]。ただし一

---

II　同様の意見を，宮台真司は社会システム論から，「役割＆マニュアル」優位の〈システム〉の全域化により「善意＆自発性」優位の〈生活世界〉空洞化した成熟社会〈後期近代〉という。(『幸福論　〈共生〉の不可能と不可避について』宮台真司，鈴木弘輝，堀内進之介 NHKブックス 2007年 p.12)

方で，こうした新入社員の意識は就職戦線が売り手市場か買い手市場かが影響要因として働くので，単純に時代順に変化するわけではない。団塊ジュニア世代は買い手市場が長く続いたあとなので，何かにつけて大きな期待をしない傾向がある。それは同調査で，「面白い仕事であれば，収入が少なくてもかまわない」に56.3%が肯定的な反応を示していることにも窺える[35]。この40年の間の変化は「ライフスタイルの五十五年体制」の消滅に伴った，若年層にとっての職業の意味の変化にも現れたのだった。

ところで，2004年に発表された『労働白書』によって若年無業者の存在が指摘されて以来，ニートの問題が社会的関心を集めるようになった。ニートとは，15歳から34歳までの就学中でも就業中でも職業訓練中でもない人である。また，『平成十五年版国民生活白書』は2001年のフリーターの数を417万人と算出した。フリーターとは，15歳から34歳の若年（ただし学生と主婦を除く）のうち，パート，アルバイト（派遣等を含む）および働く意志のある無職の人である。すなわち，ニートは無業者，フリーターは非正規雇用者と失業者であるが，これらの統計はどちらも団塊ジュニア世代と重なる。片瀬一夫（2010）は浅野智彦（2009）[36]に依拠しつつ，80年代の若者なら，フリーター的雇用形態の選択も合理的ですらあったが，すなわち時間の自由裁量と拘束的人間関係回避の選好からであるが，「90年代後半以降の社会経済的諸条件下においてそれが帰結するのは多数の若者の周辺化」であると指摘する[37]。すなわち，経済のグローバリゼーションとネオリベラリズムがもたらした雇用の流動化が終身雇用型のライフコースの標準モデル（岩間のいう「ライフスタイルの五十五年体制」）を失効させた結果が，若者に余儀ない選択を強いているというのだ。

ここで岩間による「ニートの状態ある若年層の実態及び支援策に関する調査研究報告書」（2007年3月）を見てみよう。岩間は，保留条件はあるものの，「ニート状態にある若者は，本質的に同世代の若者とさほど異なる特性をもつわけではない」という。意識面で差のつく項目にしても[Ⅲ]，「ちょっとしたきっかけで職場や学校といった『外』の生活空間に定着できず，次第に距離をおいてしまうライフスタイル（前述の，何かにつけて大きな期待をしない世代）によって形成されたもののように思えた」[38]という。すなわち，ミクロで見れば，誰でもが「ちょっとしたきっかけ」でニートになる可能性を有しているということである。岩間は，産業構造の変化（サービス産業の増大），職業観の変化（「なりわい」から「自分探し」へ），ワークスタイルの変化（たとえば，対人の感情労働の増加。以前は対自然，対モノであった）を挙げて，それらがある種の若者を働くことから排除する社会的モメントとして作用していると読む[39]。すなわちニートの問題は，個人よりも社会的な要因のほうが大きいという見方である。

---

Ⅲ　たとえば，「職場の同僚，上司，部下などとは勤務時間以外はつきあいたくない」，「仕事はお金を稼ぐための手段であって，面白いものではない」などが，新入社員意識調査と比較して1.5倍以上高い。

団塊ジュニア世代でニートやフリーターが増大するなかでも，しかし，ほとんどの若者は正規雇用を志向する。ここで労働時間を比較してみると，非正規労働者を中心に週35時間未満の短時間労働者が増える一方で，正規雇用労働者では週60時間を超える長時間労働者が増大し，30歳代の男性を中心に正社員の「働きすぎ」が見られる[40]。片瀬は熊沢誠（2006）[41]の言葉を紹介して，若年労働における「使い捨てられ」と「燃えつき」の二極化の進行に注目する[42]。2009年にネット上に頻繁に現れるようになったのは，正社員にはなったものの，甚だしいケースはいわゆる「ブラック企業」[Ⅳ]に見られる，「使い捨てられ」る若年労働者の存在である。雇用の現場で排除システムが形成されているとも言える事例が報告されているのだ。ブラック企業の多くは新興成長産業であるが[Ⅴ]，そこから一般に経営者の経験不足，競争環境の苛烈さ，高スピードの事業展開，などが予想できる。ブラック企業の共通パターンとして，大量退職者を見込んだ大量採用，入社後も続く選別過程，生き残った者の長時間労働，戦力外とされた者の退職強要（解雇は問題を伴うので自主的な退職に導く），である。正社員として残った者も過重労働で心身を病んだりするケースが多く，退職させられた者はその体験がつぎの求職活動に様々な形で悪影響を及ぼす。今野は，これらのコストはひとり若者だけが負うといった限定的問題ではなく，消費者の安全，経済・雇用システムの破壊，医療費増加，家族内の不安，といった直接的問題に加えて，少子化，市場縮小，財政破綻といった国家的長期的問題の要因になると主張する。

こうしたブラック企業の「使い捨て」を可能にする社会構造を，今野は日本型雇用を背景にした企業のもつ圧倒的な指揮命令権にあると分析する。日本型雇用の特徴は，終身雇用，年功制に加えて，新卒一括採用，高福祉策などがある。要するに労働力不足時代に始まる人材囲い込み方式である。国も企業の福祉策を見越して，社会政策は企業依存的に対処してきため，企業のもつ指揮命令権をさらに後押しする結果を招いた。すなわち労働者は労働市場において徹底的に依存的存在に置かれているのだ。さらに，買い手市場にあっては，就活の段階から「キミの代わりはいくらでもいる」と，生きる力を殺がれるようなメッセージを浴び始め，入社を前にして「どんな条件でも働きます」と，すでに服従的労働者に仕上がっているのである。その上で入社後も選抜が続けられ，なかなか正規のメンバーとして扱われない。すでに十分自尊感情を痛めつけられている彼らは，会社のパワハラに対する怒りよりも自己反省の言葉を口にするという。そのとき先行世代は長時間労働や過労もこなしてきたと，3年で3割が離職する若年層に我慢のなさを批判しがちであるが，かつては長期雇用と引き替えに引き受けてきた構図があったことを忘れては

---

Ⅳ 「ブラック企業」とは，「違法な労働条件で若者を働かせる企業」のことであるが，実はブラック企業の定義は想像以上に困難であるという。もし単純に違法な企業というのなら，昔から存在するからである。今野が特にブラックと呼んで問題視するのは，「使い捨て」を可能にする社会構造のほうに問題の本質を見いだしているからである。（今野，p.180）

Ⅴ 朝日新聞デジタル版（2012年12月31日）において，パナソニックグループに「追い出し部屋」と呼ばれる部署があるという記事が配信された。「こうした部署はここ数年大手企業で目立つようになっている」という。

なるまい。

フリーターやニートの増加は個人の選択と言うよりは，当然の結果とも言える側面がある。政界も産業界も非正規雇用を増やす方策をとり，その背景は経済のグローバル化による国際競争力の圧迫があり，さらに言えば資本主義はつねに外部を必要として進化するため，こうなるのは必然なのである。しかしそれは事の一面を見た言説であって，圧力がかかったときに対抗する選択はつねに複数あるはずである。本稿ではそれを実践している企業の事例について取り上げないが，当然のように非正規雇用を問題解決の方途として反射的に選択することには疑義を呈しておきたい。

## 【透明化という対処方法】

バウマンは人間を廃棄物処理することの限界を訴えた。すなわち「余分」者が「空き地」を求めて流出しつづけた結果，今や「満杯」のため逆流も起きているという見方である。ヨーロッパにおいては地理的にも言語・文化的にも障壁が比較的低いため相互流入は現実的に可能性が高いが，日本で同様の水準で同様の展開が起きているかは疑わしい。本稿では，日本における「余剰人口」のほとんどは国内にあったまま，社会学的政治学的な意味で廃棄処分されているのではないか，と考える。どういうことか。生物学的には存在しているが，社会学的政治学的にはなきがごとくに扱われる，すなわちいじめと同型の対処がされているのではないだろうか。

この見解の根拠を本稿では，精神科医の中井久夫[43]が記述した，いじめの三段階が，今野が要約したブラック企業の排除システムと酷似している点に求めている。

中井はいじめの過程を「孤立化」「無力化」「透明化」と仮定する。ただしそのときの文脈は学校である。「孤立化作戦」の一つは標的化である。「誰かがマークされたということを周知させる。そうするとそうでない者がほっとする。そうして標的から距離を置く」[44]。加害者は，被害者から距離を置かない者には，それが損であることをちらつかせることも忘れない。つぎに，いじめられる対象がいじめられるのに値することをPRする。たいていが謂われのない難癖だが，それは当人にも向けられ，当人はことの理不尽さに混乱する。この段階ですでに「無力化」は始まっているが，反撃や反抗は一切無効であることを知らしめる。たとえば，大人に話すことは事態を悪化させることを信じ込ませるのである。「ここでしっかり暴力をふるっておけば，あとは暴力をふるうぞというおどしだけで十分」[45]になり，自発的に隷従するようになる。この辺りからいじめは次第に「透明化」して，周囲の眼に見えなくなる。これを中井は人間の心理的メカニズム「選択的非注意 selective inattention」で説明し，善良なドイツ人に強制収容所が「見えなかった」史実を挙げる。特に「透明化段階」において辛いのは「無理難題」である。何とか遂行した無理難題が「加害者には紙片のように軽いものであるということ，すなわち，自己の無価値化」[46]が

完成することである。

一方，今野が聞き取りをしたブラック企業による排除の共通手順は，以下のようになる。企業から戦力外とみなされた者は，先ず別室に呼ばれ，「面談」が始まる。能力不足を言い立てられ，自己反省を強いられ，無理難題を課せられる。先述の通り，この時点ですでに新人は自らの代替可能性を承知しており，隷従的態度も身についている。回りは，気の毒に思いながらも，彼／彼女なら仕方ないと思いつつ，自分ではないことに安心し，それでもつぎは自分かもと恐怖心を持つ。学校と違うのは，企業では追い出すことを職務にしている者がおり，戦略的にパワハラが繰り返される。目標は「自己都合退職」である。そのプロセスで被害者は心身の健康を損なうことが多く，病院通いが始まり，休職し，退職，となる。生き残り組にとって彼らの存在は，「自分はああはなるまい」という発憤の材料となり，中井のタームでは「透明化」される。先述したが，世間から見るとフリーターやニートは，わがまま，怠惰，能力不足，のレッテルが貼られ，ときに犯罪予備軍と見なされる視線もある。つまり当人の苦境は社会問題化されず，自己責任として個人化され，社会的政治的には透明な存在として扱われる。ケアの対象にはしないが，犯罪予備軍としては監視の対象にはしている，というのが日本の現状ではないだろうか。以上，日本では人間廃棄物は透明化処理されていることを考察した。

## 【おわりに】

最後に，雇用問題はキャリア教育に直結する問題でもあるので，それについて一言付しておきたい　。正規雇用での就労を促し，非正規雇用での就労の回避を勧める教育は，正規雇用形態による就業の自明性を背景に成立するものである。そこにあるのは正規雇用が正常で，非正規雇用を逸脱とみなす通念である。ところが，実態は正規雇用と非正規雇用の境界線は限りなく薄くなってきている。筆者は拙稿（2012）で[47]，正規雇用を前提にキャリア教育をすることの困難を，雇用実態からの乖離，若者の労働観の変容から論じたが，非正規雇用を選択するという「逸脱行動」をとる者が小規模のときは威嚇教育（たとえば生涯獲得賃金を比較して見せる，など）も効果があろうが，これだけ非正規が広範化し，それが収縮する見込み見いだせないとなれば，実態にそった情報を与えて認知能力を高める教育こそが必要になってくるはずである。たとえば，非正規雇用を前提とした家計設計やそれに見合った自分の生き方模索をサポートする教育こそ必要であろう。もし現状に対する無知や無視から，過去の幻想の上に立ったキャリア教育を続行すれば，効果がないどころか，信頼関係が失われ，その他の教育の基盤すら逸失することにもなりかねない。また，正規雇用が正解であるとか，非正規雇用が絶対駄目というキャリア教育ではなく，どちらを選択したにしろ，それが良かったかどうかは，文脈に依存するということ，事後にしか判断できないということは教えなければならないだろう。ただし，バウマンの描出した現実はも

はや教育が対応できる範囲を超えてしまっているようである。この無力感こそバウマンが明白にしたかったものなのかもしれない。

(注)「グローバリゼーション」というタームをバウマンは特に説明せずに使用しているが，宮台真司はグローバリズムと「グローバライゼーション」の概念の違いを明確にしている。前者はレーニンの帝国主義の定義とむすびついたもので，軍事力を背景にした経済覇権の追求を意味し，後者は冷戦体制の終焉によって生じたもので，①軍事力の一極集中化，②高度情報社会化，③アメリカン・ウェイ・オブ・ライフの浸透，の三つの事態が複合されたもので，両者の大きな差は③で顕著に現れる（奥平康弘 / 宮台真司〔2002〕『憲法対論　転換期を生きぬく力』平凡社新書 pp.61 ～ 62)。また，簡単に，「グローバル化とはブレトンウッズ体制の終焉に始まる資本移動の自由化のこと」（東浩紀〔2010〕『日本的想像力の未来』毛利嘉孝「トランスナショナルな『理論』の構築に向けて　日本研究と文化研究」NHK ブックス p.232）という説明もありうるが，文脈からして，バウマンはこのシンプルな定義で考察しているといえよう。

**【参考文献・引用文献】**


1　杵渕友子〔2011〕「災害資本主義」型経営管理という視点　なぜ労働者は従順なのか　城西短期大学紀要 第 28 巻　第 1 号　pp.1 ～ 9
2　Beck, Ulrich〔1986〕*Riskogesellschaft Auf dem Weg in eine andere Moderne* Suhramp Verlag（東廉／伊藤美登里［訳］1998 危険社会　新しい近代への道　叢書・ウニベルシタス 609　法政大学出版部）
3　Bauman, Zygmunt〔2004〕*Wasted Lives*（1st Edition）Polity Press（中嶋道男［訳］2007　廃棄された生　モダニティとその追放者　昭和堂
4　同上書　p.8
5　同上書　p.8
6　バウマン　上掲書　p.8
7　同上書　p.11
8　同上書　p.13
9　同上書　p.10
10　同上書　p.11
11　同上書　p.17
12　同上書　p.20
13　同上書　p.20
14　同上書　p.22
15　同上書　p.26
16　同上書　p.28
17　同上書　p.33
18　同上書　p.37
19　同上書　p.52
20　同上書　p.53
21　同上書　p.56
22　同上書　p.56
23　同上書　p.58
24　同上書　p.65
25　同上書　p.68
26　同上書　p.69
27　同上書　p.74

28　同上書　p.89
29　同上書　第3章
30　岩間夏樹〔2010〕若者の働く意識はなぜ変わったのか—企業戦士からニートへ　ミネルバ書房
31　同上書　p.35
32　同上書　p.144
33　日本生産性本部・日本経済青年協議会〔2009〕平成21年度新入社員の「働くことの意識」調査報告書
34　同上書　p.161
35　同上書　p.162
36　浅野智彦〔2009〕「序論」リーディングス日本の教育と社会　第十八巻若者とアイデンティティ　日本図書センター　pp.3～19
37　片瀬一夫　階層社会のなかの若者たち—もう一つのロスジェネ　小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編〔2010〕若者の現在　労働　日本図書センター　pp.56～57
38　同上書　p.176
39　同上書　p.178
40　総務省統計局〔2008〕平成十九年版　就業構造基本調査
41　熊沢誠〔2006〕若者が働くとき—「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず　ミネルヴァ書房
42　片瀬　上掲書　p.58
43　中井久夫〔1997〕アリアドネからの糸　みすず書房
44　同上書　p.9
45　同上書　p.14
46　同上書　p.20
47　杵渕友子〔2012〕社会変容と非正規雇用選好の相関　新たなキャリア教育の必要性　城西短期大学紀要 第29巻　第1号　pp.11～23